横浜キネマ倶楽部
第３７号　会報
2014年11月24日発行

第３７回上映会

ハンナ・アーレント

HANNAH ARENDT

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督作品
（2012年／ドイツ・ルクセンブルク・フランス／114分）

©2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou Luxembourg sarl,MACT Productions SA ,Metro Communicationsltd.

2014年11月24日（月・祝）
［上映時間］ ①11:00～　②14:00～
［講　　演］ 13:00～13:50 フェリス女学院大学教授　矢野久美子さん
［会　　場］ 神奈川公会堂

『 ハンナ・アーレント 』

[あらすじ]

1960 年、ナチス親衛隊でユダヤ人の強制収容所移送の責任者だったアドルフ・アイヒマンが、イスラエル諜報（ちょうほう）部に逮捕される。ニューヨークで暮らすドイツ系ユダヤ人の著名な哲学者ハンナ（バルバラ・スコヴァ）は、彼の裁判の傍聴を希望。だが、彼女が発表した傍聴記事は大きな波紋を呼び……。

[スタッフ /キャスト]

監督・・・マルガレーテ・フォン・トロッタ

製作・・・ベティーナ・ブロケンパー
ヨハネス・レキシン

脚本・・・マルガレーテ・フォン・トロッタ
パメラ・カッツ

撮影・・・カロリーヌ・シャンプティエ
美術・・・フォルカー・シェイファ
編集・・・ベッティナ・ベーラー
音楽・・・アンドレ・マーゲンターラー

©2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou Luxembourg sarl,MACT Productions SA ,Metro Communicationsltd.

- バルバラ・スコヴァ・・・ハンナ・アーレント
- アクセル・ミルベルク・・・ハインリヒ・ブリュッヒャー
- ジャネット・マクティア・・・メアリー・マッカーシー
- ユリア・イェンチ・・・ロッテ・ケーラー
- ウルリッヒ・ノエテン・・・ハンス・ヨナス
- ミヒャエル・デーゲン・・・クルト・ブルーメンフェルト

監督・脚本　マルガレーテ・フォン・トロッタ　プロフィール

1942年2月21日ドイツ・ベルリン生まれ。60年代に移り住んだパリで、ヌーヴェル・ヴァーグやイングマール・ベルイマンの作品に影響を受けた後ドイツへ戻り、ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーの『悪の神々』(69年)や『聖なるパン助に注意』(70年)など、女優として多数、TV や映画に出演。フォルカー・シュレンドルフの『ルート・ハルプファスの道徳』(71年)へ出演したのをきっかけに、同年シュレンドルフと結婚。脚本の執筆や短編映画の制作にも関わるようになり、夫婦で共同監督・脚本を務めた『カタリーナ・ブルームの失われた名誉』（75年）で監督デビュー。単独での監督デビューは『第二の目覚め』（78年）となり、以降、『鉛の時代』（81年）がヴェネチア国際映画祭金獅子賞を受賞、『ローザ・ルクセンブルク』（86年）がカンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞するなど、ニュー・ジャーマン・シネマを牽引する世界でも有名な女性監督の一人。（公式サイトより）

<<<<<<　講演者　矢野久美子さん　プロフィール　>>>>>>

フェリス女学院大学教授。専門はドイツ政治文化論・思想史。
徳島県生まれ。
2001 年、東京外国語大学大学院博士後期課程修了。
「ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所」で博士（学術）。
フェリス女学院大学国際交流学部 助教授を経て、
現在は、フェリス女学院大学国際交流学部 教授。

（著書）

『ハンナ・アーレント「戦争の世紀」を生きた政治哲学者』 単著 （中公新書）
『ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所』 単著（みすず書房）
『20 世紀の思想経験』 共著 （法政大学出版局）
『政治の発見(1)生きる』 共著 （風行社）

（翻訳）

ハンナ・アーレント『ユダヤ論集』全 2 巻 J・コーン、R・H・フェルドマン編
山田正行、大島かおり、佐藤紀子、齋藤純一、金慧共訳 （みすず書房）
『アーレント政治思想集成』全 2 巻 J.コーン編 齋藤純一、山田正行共訳 （みすず書房）
E.ヤング=ブルーエル『なぜアーレントが重要なのか』（みすず書房）

（テレビ出演）

NHK 視点・論点「ハンナ・アーレントと"悪の凡庸さ"」（2014 年 6 月 25 日放送）

****
****

ハンナ・アーレント
HANNAH ARENDT

©2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou Luxembourg sarl,MACT Productions SA ,Metro Communicationsltd.

・・・・・ アンケート集計結果 ・・・・・

＜ 2014. 8. 30 第36回上映会 ＞

『ペコロスの母に会いに行く』

来 場 者 数　　225名
アンケート総数　81枚（回答率36.0%）

作品についての評価・感想

「とても良かった」46枚　56.8%

●ユーモラスで心温まる映画でした。
●知らなかった映画なので、今回みれて良かった。笑いもあり、涙もあり、盛りだくさん。子供はどの子もいろんな不幸をかかえて育っていくものなのですね。年取ると親子も夫婦みたい。
●老いについてコミカルに描かれており、あまり重苦しくならず自然に鑑賞できた。
●私の母も亡くなる前、4～5年認知症でした。当事者家族会があり大変な想いをしている方のお話を沢山聞きました。母も高校生になる私の息子を、管理人室前で小学生の息子を想い待っていた様です。住人の人にその事を聞き、また会話の中から母の様子を知ることになりましたが、今回の映画の中で家族として、大事で接したりかまえて接することより、この様に、なごやかに、こんな風に接することができるという事が理解できる素晴らしい映画だと思いました。
●毎回良い作品で満足しています。本日の映画は、特に作品、出演者共、観ごたえ充分でした。
●私の母が亡くなってから、母の会いたい人に気がつきました。
●赤木春恵、岩松了がよかった。本当は深刻な話なのに心がほっこりあたたまる映画でした。
●現在の自分と重なり、考えさせられた。
●還って行く所があるからガンバれる。思い切り泣けました。おかしさや、格好悪さ、恋しさや、辛さがとてもステキに描かれていると思います。心暖まりました。ボケるのも悪くないと思える世の中になればいいなと思いました。
●いつもは高齢の母を誘って参加させていただいていますが、今日は一人できました。さいわい母は元気なので観せたくありませんでした。
●ようやく「ペコロスの母」に会えました。「ペコロスの母」に会いに来る人たちが、皆暖かな気持ちになるのがいいです。生きている人も亡くなった人も。みつえさんの心が暖かいからでしょう。
●介護の重さを支える人々によって良くも悪くも成る。受ける側の気持ちがよく映像に表れていた。
●時々ユーモアをまじてていたし、ゆういち、まさきの接し方がとても良かった。介護施設の職員たちの接し方も参考になった。「マダラボケ」という言葉があるが、みつえのような状態のことをいうのかと思った。確かに「ボケルとも、悪かことばかりじゃなかかもしれん」
●家族の底力、愛のあり方にショックを受けた。各自の持ち前の人格もあるのだろうが、何があろうとつながりを大切に乗り越えてゆく人生の素晴らしさを教えられた。
●かわいらしい絵と明るいタッチで、認知症の母とその家族という重いテーマでありながら楽しく観られました。原作を読んでみたくなりました。認知症になったら人格が変わってしまうと思っていましたが、他人にわからないだけで、本人の中ではきちんと筋が通っているのだなと思いました。
●感動しました。最後のセリフ、忘れられません。
●2日前に仕事関連で認知症サポート講習を受け、以前から観たいと思っていた映画でしたので申込みました。認知症への理解を深めることができましたし、自分の家族にも起こり得る問題なので本当に良かったです。笑えて泣けて、お化粧が取れてしまう程、感動しました。漫画も読んでみたいと思います。

「良かった」31枚　38.3%

●少しずつ記憶が薄れてゆく母と重ねあってしまった。

●老いて過ごした人生の最初の頃からのツラツラを思い起こして最後にいってきの涙が流れた。
●よい映画を見て明日からまた頑張って働こうと思いました。
●身につまされます。
●「明るくも暗く、楽しくも悲しい、ほっこり涙、映画に感謝」
●何時お手紙(案内)をいただきありがとうございます。暫く体調を悪くして伺えませんでしたが、暫くぶりですばらしい映画でした。涙もでたり、笑いもあり、今日は本当にありがとうございました。
●どうしても重くなりがちな題材のものですが、コミカルな部分も多く楽しく観れました。

「普通」2枚　2.5%

●むつかしい問題をうまく映像化していると思いました。

「あまり良くなかった」1枚　1.2%

「無印」1枚　1.2%

●補聴器をつけてもスピーカーの音が聴きとれません。日本語字幕は本当に助かります。ありがとうございました。今後もよろしく。

石子順氏講演の感想

●映画のバックグランドが聞かれてよかったです。
●時間がなく聴けず残念！
●石子順さんは好きな評論家の一人です。楽しみにして聞きました。懐かしく思い出される話が沢山あり、人として生きるということを描くむつかしさ、二人の監督の違いの話から良くわかりました。家族の母と子の愛情の描く事はむつかしさと素晴らしさ、それを見る側の感受性があることもわかりました。もっと色々聞きたいと思います。
●時間が少し長いように思いました。手話の方おつかれさまでした。
●多角的なお話～映画というものも含め～いろいろ考えが深まった。
●映画の意義が解りやすく解説されて。
●内容は良かったが、途中から何人もの人が入ってきて、気が散ってしようがなかった。
●近く我身か！！
●介護、喜劇映画として見て良いのか、身近に起きる事として、あまり深刻にならず、これからの社会現象としてとらえていきます。大変参考になりました。
●私は二年前に母を 101 才で亡くしました。晩年は老健にお世話になりましたが亡くなる四日前まで元気でした。母は明治末生まれですが「私は明治・大正・昭和・平成の四世代を生きたので、人生を充分に楽しんだ」と良く申しておりました。三年前に内閣総理大臣と横浜市長より百歳の長寿のお祝いとして、大臣よりは銀盃と表彰状、市長よりは「写真入れ」を頂きとても喜んでおりました。今回の映画を見て母と楽しく暮らした日々を思い出しました。（追記）母の口ぐせ。「私は関東大震災と東京のアメリカの大空襲を経験しているのでこれ以上恐ろしいものは無い」
●まったく聞こえません。FM 波で流してくれたらラジオで受信し、聞くことができます。
●聞いていて少々辛かった。内容がないのに無理に話されているようで。講演はなれていらっしゃらないのでしょうか？

©2013「ペコロスの母に会いに行く」

< 2014. 10. 13 特別上映会 >

『息子』 日本語字幕付き

来 場 者 数　161名
アンケート総数　45枚（回答率38．8%）

©1991 松竹株式会社

作品についての評価・感想

「とても良かった」29 枚　64.4%

●最後の家のあかりがつくシーン、実に良かった。ほのぼのと幸せな気分になりました。私も主人公の様な生き方がしたいです。
●現代(今の時代)より、この映画が映した時代の方がまだ幸せだったかも。
●本当に良い映画でした。ありがとうございます。
●老後、家族、地域、共通の話題で身につまされました。ひとは独で生きる覚悟と、共に生きる覚悟のないまぜを生活していくことが大切と思っています。
●老いて、生きがいを持つことの難しさを感じた。
●この映画に手話を取り入れたのが良かった。ろうあの人たちにもこの映画を楽しんで見てもらえるのではないかしらと思った。又、地方の高齢者の問題も考えさせられました。ろう者の社会問題と二つの大事な高齢者の社会問題、考えさせられる。
●23年ぶりに見ましたが、名作だと思います。

「良かった」16 枚　35.6%

●家族の愛情が感じられる映画でした。構成も、それぞれの話の展開もよかったです。
●映画に出ていた何人もの方が今は亡き人、でもいい味出しているなあと思いました。おとうさんがしみじみと昔を振り返る場面は、人生の流れを考えさせる、ジーンとさせるものがあり多くの方々が感じられる(その時になると)ことだと思いました。彼女も哲夫くんと知り合うことであの暗いちょっと淋しい倉庫のお勤めに光がさし(それはむなしく生活している哲夫くんも同じ)とてもほほえましいカップルでありました。哲夫くんの真剣さは彼女が魅力だったのでしょう。(ろうあであれ一人の女性として)
●バカ息子(哲雄)がたくましく自立していく姿が、特に感動的でした。ありがとうございました。(親父)俺も頑張って死ぬまで楽しく生きるんだなあと思った。

妹尾映美子さん講演の感想

●手話コーディネーターの仕事と、映画でのエピソードと、ろうあ者をどう演じられるかの感性がよくわかりました。
●手話に男言葉と女言葉があるとはじめて知りました。ろうあ者のマドンナの出る寅さん、いつか誰かに演じてほしいです。
●手話の表し方のいろいろ(場面や地域等において)あることを教えてくださいました。分かり合える手段としてもっともっとあらゆる機会を通じて(映画などでとり上げられると普及することでしょう)皆が理解をし身につけていけるといいとあらためて感じました。妹尾さんとは昔一時期手話教室でお世話になり本日お目にかかれて全然変わらぬさわやかさと明るさに感心しました。(多方面にご活躍だからかなと感じました。大変なところもおありでしょうが今後も頑張ってください。
●話し方に情熱が伝わってきた。
●講演の手話のコーディネーターのお話も勉強になりました。この映画に手話を取り入れたのが良かった。
●講演が1回と理解できておらず、少ししか聞けず残念です。

☆ アンケートご協力ありがとうございます ☆

[[　横浜キネマ倶楽部のページ　]]

「青い山脈」の地で行われた映画フェスティバル

横浜キネマ倶楽部会長　伊藤　幹郎

全国映連第44回フェスティバルは中山道の宿場町として栄えた岐阜県中津川で開かれた。2014年10月11日と12日の2日間である。「イタリア映画の旅」で一緒した名古屋の岩田さんに誘われていたこともあって初めて参加した。

駅前の「にぎわいプラザ」のホールにて、「映画と人と街」と題する名城大学水尾衣理教授の講演とフォーク・シンガー笠木透氏の「見る聞く話す」のライブである。2日目には戦前の無声映画を上映して活動弁士澤登翠さんの活弁と話を聞いた。

水尾教授は工学博士という肩書で、映画と一体どういう関係のある話をするのかと思っていたところ、映画は芸術の中で圧倒的な情報量を持ち文化的な発信力も大きいので人間にとって影響も大きいという話から始まった。具体的には、北九州市の門司港周辺はロケ地として多くの映画に登場するが、これは自治体が協力しており、ロケ使用を市民が迷惑がらない雰囲気が醸成されているからということであった。その他愛知県の明治村や山形県の映画村などがあげられ、映画が人と街をつなぐ役割を担っており、皆さんもそれに参画してほしいということであった。

最後は地方の中心都市に映画館がなくなっている現状を指摘しながら、なにはともあれ「映画館に行こう」という話で締めくくられた。

期待に反して興味深い話が山盛りで、多くの知識を授かったのはうれしい誤算。

笠木氏のライブは歌よりも語りが多く、抜群に面白かった。戦争中にも庶民は不戦・えん戦の歌を替え歌で唄っていたこと、その内容を面白く語り、かつ唄われた。痛烈な現政権批判などスカッとなるような話が満載で時間をオーバーしてのライブであった。

マスメディアに登場することはほとんどなくこの故郷で1000を超える曲を作り出しているという。永六輔が7年前に京都・円山野外音楽堂で開かれた「宵山コンサート」で「私は笠木透の存在を知って、詩を書くのを止めた」と言わしめた人物である。全国ネットに出ないため多くの人が聞けないのは本当に惜しいと心から思った。

終了後、会場を「ちこり村・バーバーズダイニング」に移し、交流会を行った。各地報告の冒頭に当倶楽部の報告を求められ、わが倶楽部の成り立ちからどの様な活動をしてきたか、現状はどんな問題があるかなどを話した。

参加したのは北海道から九州までの95人であるが、時間の関係上報告したサークルは少なく、各地の現状や問題点を聞けずに終り残念であった。

そしてこの日の最後に、中津川でロケされた映画の主題歌を皆で唄ってお開きとなった。そこで駄句を一つ。

「秋の夜に青い山脈こだまする」

〈これまでの上映作品〉全40回　（特別上映会4回含む）

美しい夏キリシマ/パッチギ！/カーテンコール/二人日和/ゆれる/トリノ、24時からの恋人たち/
長い散歩/天空の草原のナンサ/イノセント・ボイス―12歳の戦場―/モーターサイクル・ダイアリーズ/
恋するトマト/シッコ/歓喜の歌/赤い風船・白い馬/三本木農業高校、馬術部/ラストゲーム～最後の早慶戦/
マリア・カラスの真実/ディア・ドクター/扉をたたく人/縞模様のパジャマの少年/春との旅/
小さな村の小さなダンサー/冬の小鳥/ホームカミング/ミツバチの羽音と地球の回転/デザートフラワー/
ハーモニー心をつなぐ歌/ドーバーばばぁ織姫たちの挑戦/エンディングノート/旅芸人の記録/トガニ/
月世界旅行・メリエスの素晴らしき映画魔術/かぞくのくに/警察日記/名もなく貧しく美しく/よみがえりのレシピ/
きっと、うまくいく/日本の悲劇/ペコロスの母に会いに行く/息子

次回上映会のお知らせ

日時:2015年 2月 28日（土）
①11:00 ②13:00
③14:40

入場料:　会員無料／賛助会員　８００円
前売り一律　　１，０００円
当日一律　　１，３００円
障害者　１，０００円　介護者１名無料

会場:横浜市西公会堂　045-314-7733
（ 横浜駅下車徒歩１０分、相鉄線平沼橋駅下車徒歩８分 ）

©琉球朝日放送.

『 標 的 の 村 』 2013年／日本／91分／ブルーレイ上映

監督：三上智恵／統括プロデューサー：賀数朝夫／プロデューサー：謝花 尚／
撮影：寺田俊樹／ナレーション：三上智恵／音楽：上地正昭／音声：木田 洋／
編集：寺田俊樹、新垣康之／構成：松石 泉／題字：金城 実／タイトル：新垣政樹

日本にあるアメリカ軍基地・専用施設74％が密集する沖縄。5年前、新型輸送機「オスプレイ」着陸帯建設に反対し座り込んだ東村（ひがしそん）・高江の住民を国は「通行妨害」で訴えた。反対運動を委縮させるSLAPP裁判だ。わがもの顔で飛び回る米軍のヘリ。自分たちは「標的」なのかと憤る住民たちに、かつてベトナム戦争時に造られたベトナム村の記憶がよみがえる。10万人が結集した県民大会の直後、日本政府は電話一本で県に「オスプレイ」配備を通達。そして、ついに沖縄の怒りが爆発した。

2012年9月29日、強硬配備前夜。台風17号の暴風の中、人々はアメリカ軍普天間基地ゲート前に身を投げ出し、車を並べ、22時間にわたってこれを完全封鎖したのだ。この前代未聞の出来事の一部始終を地元テレビ局・琉球朝日放送の報道クルーたちが記録していた。真っ先に座り込んだのは、あの沖縄戦や米軍統治下の苦しみを知る老人たちだった。強制排除に乗り出した警察との激しい衝突。闘いの最中に響く、歌。駆け付けたジャーナリストさえもが排除されていく。そんな日本人同士の争いを見下ろす若い米兵たち……。

本作があぶりだそうとするのは、さらにその向こうにいる何者かだ。復帰後40年経ってなお切りひろげられいるのか。抵抗むなしく、絶望する大人たちの傍らで11才の少女が言う。「お父さんとお母さんが頑張れなくなったら、私が引き継いでいく。私は高江をあきらめない」。奪われた土地と海と空と引き換えに、私たち日本人は何を欲しているのか？

＜下半期会員募集中！＞

◆入会金500円、下半期10月以降入会の方、年会費1，500円（一括払い、会期は2015年3月まで）
◆下半期の上映会(2回)を無料で観ることができます。
◆総会（年度初め）における議決権があります。

＜賛助会員も募集しています！＞

◆入会金不要、年会費1,000円(一括払い)
◆年度内の上映会を各800円で観ることができます。
◆総会の議決権はありませんが、ご出席いただけます。

横浜キネマ倶楽部会報
発行：横浜キネマ倶楽部

〒231－0012　横浜市中区相生町1の15
第2東商ビル4階－C　労働市民法律事務所　気付
TEL：080－8118－8502（10時～22時）
Eメール：yokohama_kinemaclub@yahoo.co.jp
HPアドレス：http://ykc.jimdo.com